

カフェ「ヌーベル」

(2014)

窓越しの日差しが心地良い某日午後、数日間続けた庭の大剪定作業も大方日処が付き、心の宿題・心配事とて特に無く、先程まで聴いていたコルトレインのジャズに心安らいだひと時・・・自転車に乗つて3分、馴染みの喫茶店「ヌーベル」に向かう、二週間振りだ。午後3時を廻つて昼食の客は皆お帰りで、夕食の準備迄の空白のひと時、ママはいつも様に一人カウンター椅子に座り、鉛筆を握り締め、週刊誌のパズル解きに必死の「ご様子である。僕が訪れるのはいつもこの時間、客の一人もない異空間である。50年前、入社して会社人という大人の世界に入らせてもらつたが、今では考えられない程当時は会社による社員への福利厚生は手厚く、仕事以外の文化体育活動は活発で、今で言ういわゆる婚活さながらのサークル活動が花ざかりであつた。僕も迷う事無く「絵画部」「陶芸クラブ」「俳句会」に入らせてもらつた。その俳句会で一緒になつたのが彼女で、美人で知的な先輩女史だつた。彼女は他に伝統ある「混声合唱団」にも所属していて、アルトの艶と憂いのある声、そして何よりもさり気ない俳句のうまさに胸ときめかされた。

すかんば を噛めば童の野に還る

聖五月ひとりの旅のミサをうく

鳴りやまぬトランペットや春の闇

梅白し 我行く闇の彼方にも

弥生生まれ我がこしかたの曆縁る

蒲公英や海鳴り遠くうつなる

(美津子)

その彼女がある日突然会社から姿を消した、当時女子は結婚即退社が当たり前の時代だったが、噂では一人で大阪に出て行つて飲食業の修行を始めたという話を聞いた。

そして何年か後、市内でカフェ・レストラン、その後スナックまで開業し、随分と流行つていたようだった。遂には、我が家すぐ近くの大団地の中に「終の棲家兼カフェ・レストラン」を構える事となつた。身寄りのない独り身の老後をゆっくりと過ごしたいとの事らしくて、一番実入りのいいお酒商売は止め、気儘に・細々と軽食とコーヒーだけ、カラオケ無しの静かな店となつた。僕も定年を迎え、ゆっくりとした時間の中、静かに、心置き無く話の出来る恰好の休み処であつた。二人きりの話・・・高齢のガラケー・オヤジと黒電話おばさんの会話は、秘密も隠し事も無いが、何よりも頭に浮かんだヒト・モノの名前が直ぐには出でこず、二人で「アレ!」「ソレ!」・・・の大人の会話が弾む。一方では合計150歳の男と女だが、かつては色男とマドンナ、夫々の身の上・身の下話に色めき立ち、時には一瞬体や指先が触れただけで微妙な電気が走る?

その店にはもう40年の年期を経た古い「ステレオセット」が置いてあり、レコードとCDが雑然と山のように積まれ、ママが軽いリューマチ症状の不自由そうな指でCDケースの蓋を開けるのに苦労しているのをいつも見せられていた。昨年1年間は、僕の人生の音楽総まとめの最

中でもあり、僕のアルバムの中から彼女の希望を聞いては何枚かのCDをせつせと作っては進呈した。一方では混声合唱団出身の彼女からは僕の知らない音楽の世界・・・贊美歌やアリヤ・歌曲の世界を教えてもらい、新鮮だった。

「昔、彼氏に貰ったポルトガル土産のレコードの「黒い？暗い？船」という曲が忘れられない」と言うのでネットで調べたら見事にヒット、ポルトガルの国民的歌手アメリヤ・ロドリゲスの代表的な歌「バルコネグロ、暗い船（はしけ）」だと分かり、この歌手の歌を十数曲採取しCDにして早速進呈した。また「或る夜、ラジオで」「 Hindleسترラブ」という曲を聴いたが、是非もう一度聴きたい」というので調べたらダイアナロスの名曲であることを知り、彼女の名曲集もCD化して進呈した。逆にサラ・ブライトマンの「タイムツーセイグッドバイ」、「アーメージンググレース」や「ジュピター」を始めとする数々の絶唱や、プリマドンナ達の歌う贊美歌の名曲、ヘンデルのアリヤ「私を泣かせてください」、「オンブラ・マイ・フ」等などの名曲・絶唱・・・彼女から教わった音楽は新鮮で、早速僕の3000曲音楽アルバムに追加する事とした。

一年一年、そんな彼女にも歳の波は容赦なく打ち寄せる。独り身という不安・・・からか、最近、店の土地建物を手放したいと言い始めた、相続する人が誰もいない（？）という。引き出しにはメモ紙がしまって

あり『一切の延命措置はしないで下さい』と書いてある。

また最近何故か「尊厳死」にえらく興味を持ち始め、「講演会を聴講したい、会員になろうと思つ」・・・といふ事なので、帰つてネットで調べ「日本尊厳死協会」のHPをプリントして進呈したところ早速申し込み・会員登録をしたという。所でその中に書いてある、「・・・安らかな、人間らしい最後を迎える権利・・・」とは一体何なのだ！？

ポイントセニア溢るるカフェに立寄りぬ

花終わりママ若き日の色語

ケーキ屋の窓に真紅のシクラメン

コーヒー店涼しきベルに迎えらる



独り身のママの口もと桃の色

日曜を休むカフェなり小六月

みなみかぜカフェの店主は色めけり

コーヒーハマの笑顔で暖をとる

扉押せば鐘の音涼し喫茶店

しゃが

著哉活けて独り身託つカフェのママ

かこ

(秀明)

自分も年々歳を重ねるにつけ、又長年の両親の介護を経験し、そして偶々ヌーベルのママの生き様を見せられ、「人の命・寿命」・・・という事に妙に考えを巡らせるようになった。

「長生き」は神様からの賜り物なのか？ それとも懲罰なのか？

人間人々、子孫を残す仕事を終えれば生きている意味はもう無いはずなのだが、どうしてこんなに長生きするのだろう。

そろそろ自分の行く末の事を真剣に考え、浮き世の雑事・煩惱から開放され、神様・仏様の世界の事を勉強しておいたほうが良いのではと考えている。

カフェ「ヌーベル」(その後)

前号で表題のお話を紹介したが、その後3ヶ月も経たない秋の日の朝、ママが亡くなっているのを従業員が見つけた、眠っているのかと思った・・・という話だった。地元紙の訃報欄には小さく「心不全」とあつたがそれ以外、身寄りの方や葬儀の事などは全く不明。せめてのお別れに一輪の花でも・・・と思うが、真相は分からず、如何ともし難い。ママらしい潔さと思う外ない。



チロリアンランプ

その後、時々店の前を通るが、扉は閉ざされたまま。玄関前の植え込みの「モッコウバラ」・「チロリアンランプ」のアーチの元気の良さとは裏腹に、無造作に置かれた多くの鉢植えの植物たちの枯れ様が寂しく痛々しい。

あれ程、健康的で・病とは縁がなく、「延命措置」等はもつての外、そして「尊厳死」への思いを語っていた彼女が・・・身寄りのない・独り身の女の信念・・・